定着するに至っていなかったかと思われる成句も含まれている。

四　本書作製に際しては、野間光辰『西鶴集下（日本古典文学大系）』、前田金五郎『新注日本永代蔵』、麻生磯次・富士昭雄『日本永代蔵（対訳西鶴全集）』、近世文学書誌研究会『日本永代蔵（近世文学資料類従・西鶴編）』、村田穆『日本永代蔵（新潮日本古典集成）』、堤精二『日本永代蔵（校注古典叢書）』、谷脇理史『日本永代蔵（完訳日本の古典）』等、先学諸氏の研究成果より多大の学恩を蒙った。又、校正その他に関しては内村和至氏の御助力をいただいた。記して謝意を表したい。

目次

凡例……三

巻一……九

目録……一

浪風静かに神通丸……三

初午は乗つて来る仕合せ……一三

昔は掛算今は当座銀……二七

二代目に破る扇の風……一七

世は欲の入札に仕合せ……三一

巻二……三七

目録……三九

才覚を笠に着る大黒……五〇

世界の借家大将……四一

天狗は家名風車……五七

怪我の冬神鳴……四六

舟人馬方鐙屋の庭……六一

巻三……六七

目録……六九

煎じやう常とはかはる問薬……七一

世は抜取りの観音の眼……八〇
国に移して風呂釜の大臣……七六
高野山借銭塚の施主……八四
紙子身代の破れ時……八九

巻四

目録……九五
祈る印の神の折敷……九九
心を畳込む古筆屏風……一〇四
仕合せの種を蒔銭……一〇八
茶の十徳も一度に皆……一一三
伊勢海老の高買……一一七

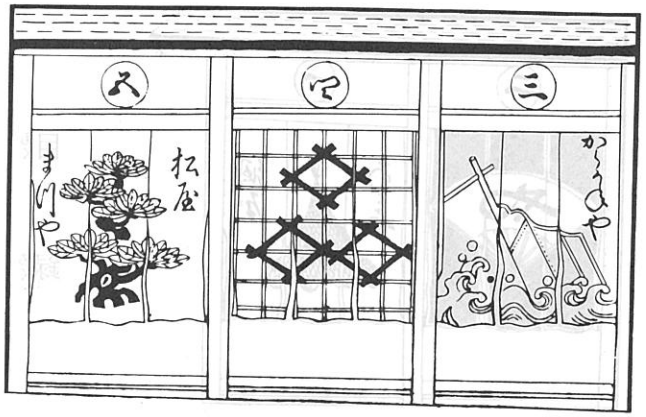
巻五

目録……一二七
回り遠きは時計細工……一二九
世渡りには淀鯉のはたらき……一三三
大豆一粒の光り堂……一四〇
朝の塩籠夕の油桶……一四七
三匁五分曙のかね……一五一

巻六

目録……一五七
銀のなる木は門口の柊……一五九
見立てて養子が利発……一六二
買置は世の心やすい時……一六八
身代かたまる淀川の漆……一七一
智恵をはかる八十八の升掻……一七五

解説……一八一



浪風静かに神通丸
和泉に隠れなき商人
北浜に箒の神を祭る女
昔は掛け算今は当座銀
江戸に隠れなき出見世
壱寸四方も商売の種
世は欲の入れ札に仕合はせ
南都に隠れなき松屋が跡式
後家は女の鑑となる者

本朝永代蔵　巻之一

初午[1]は乗つて来る仕合はせ

天道言[2]はずして国土に恵み深し。人は実あつて偽り多し。[3]その心は本虚にして、物に応じて跡なし。これ、善悪の中に立つて直ぐなる今う御代を豊かに渡るは、人の人たるがゆゑに、常の人にはあらず。一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外、出家・神職に限らず、始末大明神[4]の御詫宣に任せ、金銀を溜むべし。これ、二親の外に命[5]の親なり。人間、長く見れば朝を知らず、短く思へば夕べに驚く。されば、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢[6]覺」といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ金銀瓦石には劣れり。黄泉の用には立ち難し。しかりといへども、残して子孫のためとはなりぬ。密かに思ふに、世にある程の願ひ、何によらず銀徳にて叶は

1　初午の日に水間寺に参詣したら、幸運がまるで馬に乗って来るように訪れた話の意。「初午」は二月最初の午の日。水間寺では初午の日に参詣すると利益が大きいといわれた。
2　古文真宝後集・四「天道不レ言、而品物亨」（待漏院記）。又、当期の用例には「それ天は物言はずして国土を恵み、人は弁舌清くして心濁れり」（浄瑠璃・日本蓬莱山・三）がある。
3　古文真宝後集・五「心兮本虚、応レ物無レ迹」（視箴）
4　倹約を神に見立てた表現。
5　諺「銀は命の親、又命の敵」
6　古文真宝後集・五「夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客也、而浮世若レ夢」（春夜宴二桃李園一序）